

平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一七―二

平安宮豊楽院跡・
鳳瑞遺跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様幅広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、建物新築工事に伴う平安宮跡・鳳瑞遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

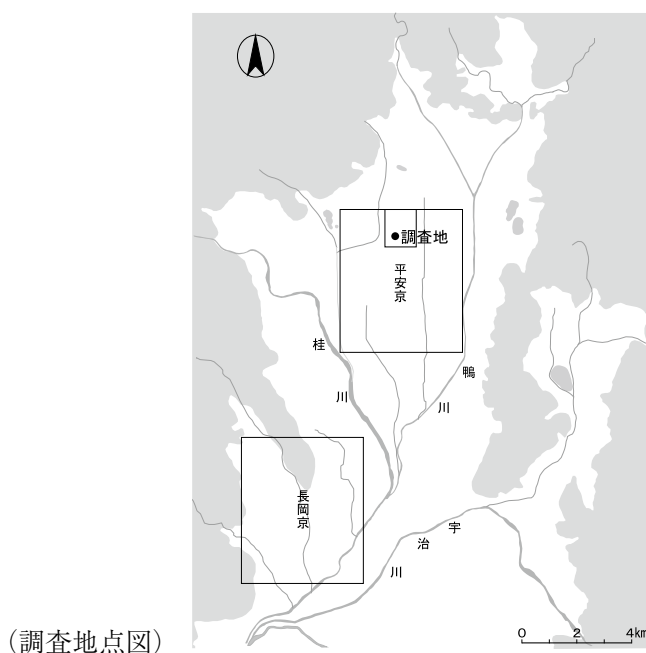
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成29年9月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安宮跡・鳳瑞遺跡（京都市番号 17 K 048）
- 2 調査所在地 京都市中京区聚楽廻西町74-2
- 3 委 託 者 株式会社ロフティ21 代表取締役 小川智弘
- 4 調査期間 2017年5月22日～2017年6月1日
- 5 調査面積 37.2㎡
- 6 調査担当者 近藤章子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 近藤章子
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 歴史的環境と立地	3
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 遺 構	7
4. 遺 物	10
5. ま と め	11

図 版 目 次

図版1	遺構	1	北調査区全景（南から）
		2	南調査区全景（北から）
図版2	遺構	1	南調査区溝状遺構7（北東から）
		2	北調査区拡張部（南西から）
		3	南調査区と史跡平安宮跡豊楽院跡（北から）

挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	調査前全景（北から）	2
図4	作業風景（南西から）	2
図5	周辺調査位置図（1：1,500）	4
図6	調査区断面図（1：50）	8
図7	調査区平面図（1：50）	9
図8	軒平瓦拓影及び実測図（1：4）	10
図9	軒平瓦	10
図10	基壇西縁・南縁、南面西階段底面比較図（1：50）	11
図11	豊楽院北部復元図（1：400）	12

表 目 次

表1	遺構概要表	7
表2	遺物概要表	10

平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡

1. 調査経過

本調査は、(仮称)京都市中京区聚楽廻西町建物新築工事計画に伴い実施した発掘調査である。調査対象地は、平安宮豊楽院清暑堂跡及び古墳時代から奈良時代の集落遺跡である鳳瑞遺跡に該当する。調査地南隣接地の2007年の発掘調査では、清暑堂基壇南縁と南面西階段及び豊楽殿北廊の基壇盛土を確認し、その成果により史跡に追加指定され、「史跡平安宮跡豊楽院跡」となっている。このように調査地は京都市の定める重要遺跡包蔵地であるため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下「文化財保護課」という)の指示により、遺構を確認するため発掘調査の指導が行われ、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が調査を実施することとなった。

調査区は文化財保護課の指導により設定し、調査は2017年5月22日から開始した。残土置場を確保するため、北側から調査に着手した。北調査区の調査終了後には埋め戻しを行い、南調査区へ反転して調査をすすめ、清暑堂に関連する遺構を確認することができた。掘削深度に制限があったため、遺構・攪乱などについても、制限内での掘削にとどめたが文化財保護課との協議に基づき、一部分については掘下げや拡張を行った。また図面作成、写真撮影などの記録作業を行った。6月1日にはすべての作業を終了した。調査中は、文化財保護課の臨検・指導を受けた。なお、清暑堂の遺構は現地保存のために土嚢で保護し、埋め戻しを行った。



図1 調査地位置図(1:2,500)

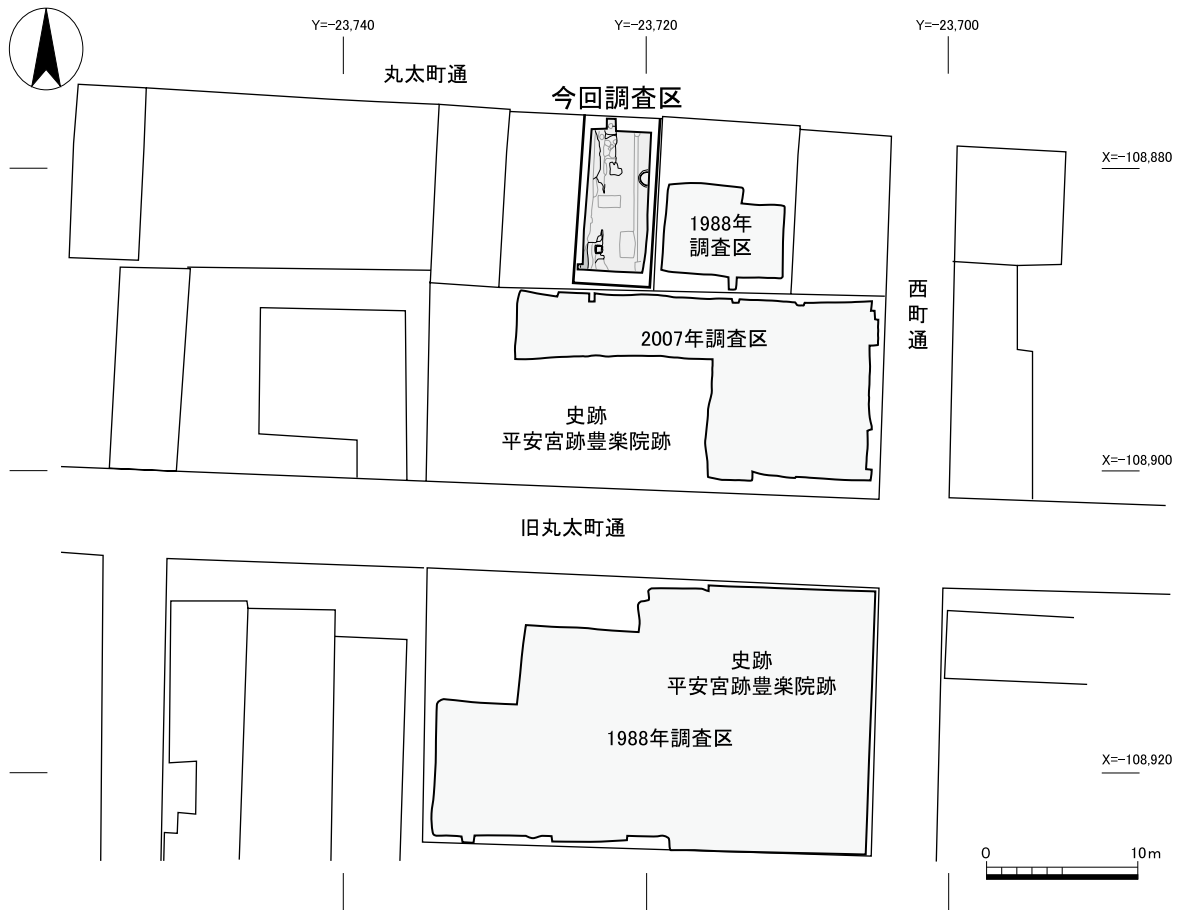


図2 調査区配置図 (1 : 500)



図3 調査前全景 (北から)



図4 作業風景 (南西から)

調査の結果、調査区南西部で、建物基壇の延石の抜き取り痕と思われる溝状遺構を検出した。これは、清暑堂基壇西縁にあたる。

2. 位置と環境

(1) 歴史的環境と立地

平安京は、断層運動の陥没によって作られた京都盆地北部のほぼ中央に位置し、東は鴨川、西には桂川の2つの河川に挟まれ、河川によって形成された複数の扇状地からなる。

平安京域は、北東部が高く、南西部が低い地形となる。北東部では鴨川の洪水が及びやすく、南西部では桂川の氾濫の影響を受ける低湿地となっている。この中で平安宮は最も安定した中央部北寄りに立地する。宮域の広さは東西384丈（約1,146m）、南北460丈（約1,393m）である¹⁾。

平安宮造営以前の遺跡としては、縄文時代から弥生時代を中心とする二条城北遺跡、古墳時代後期を中心とする聚楽遺跡、古墳時代から奈良時代の鳳瑞遺跡があり、調査地はその中の鳳瑞遺跡に含まれる。

平安宮豊楽院は現在の丸太町通を北限、七本松通を西限とし、規模は南北134丈、東西57丈、現地形は北から南へ緩やかに傾斜している。豊楽院は政務を執る正庁である朝堂院の西側に位置し、国家的饗宴の場として造営された。豊楽院の北部に位置する豊楽殿を正殿とし、豊楽殿の北側には豊楽殿後房、後堂、豊楽殿小安殿とも呼ばれる清暑堂が位置する。清暑堂は豊楽殿に出御する際の天皇の控えの場所として使用されていた²⁾。

(2) 既往の調査（図5）

豊楽院は、建物配置や規模が明らかになってきている朝堂院や内裏などに比べ、調査例が少なく、遺構配置など不明な点が多かった。しかし、豊楽院の北部については近年の調査により貴重な調査成果が得られ、建物の位置や規模が明らかになりつつある。以下に、周辺の主な調査成果について述べる。

調査1 1928年調査。電気軌道（市電）第13号線の敷設工事に際しての丸太町通改修工事に伴い、土管等を入れる溝を掘削中、大量の瓦と基壇石材を発見した。その後、最初の地点より南西で基壇の一部を検出したため、調査を実施する。さらにその東方で基壇を検出した。調査時には豊楽院に関連する遺構との認識はあったが、豊楽院内のどの部分にあたるかまでは特定できていない³⁾。その後、当時の地籍図から上記の基壇が、豊楽院北門である不老門南東隅及び清暑堂北縁部であることを推測している⁴⁾。

調査2 1973年調査。個人住宅建設に伴い実施した発掘調査である。焼土層から多量の瓦・土器片が出土した。また、地山直上で凝灰岩の破片や屑を含む整地層を確認した。調査地は中世以降の攪乱が認められず、焼土層は豊楽院火災層と判断した⁵⁾。

調査3 1976年調査。個人住宅建設に伴い実施した発掘調査である。敷地は南側（調査2）より1m以上高く、基壇の形態が残存する箇所として認識されていた。調査では、豊楽殿基壇盛土と礎石根固めの壺掘地業を検出した。基壇盛土は大きくは4層、細密には16層以上に分層される版築

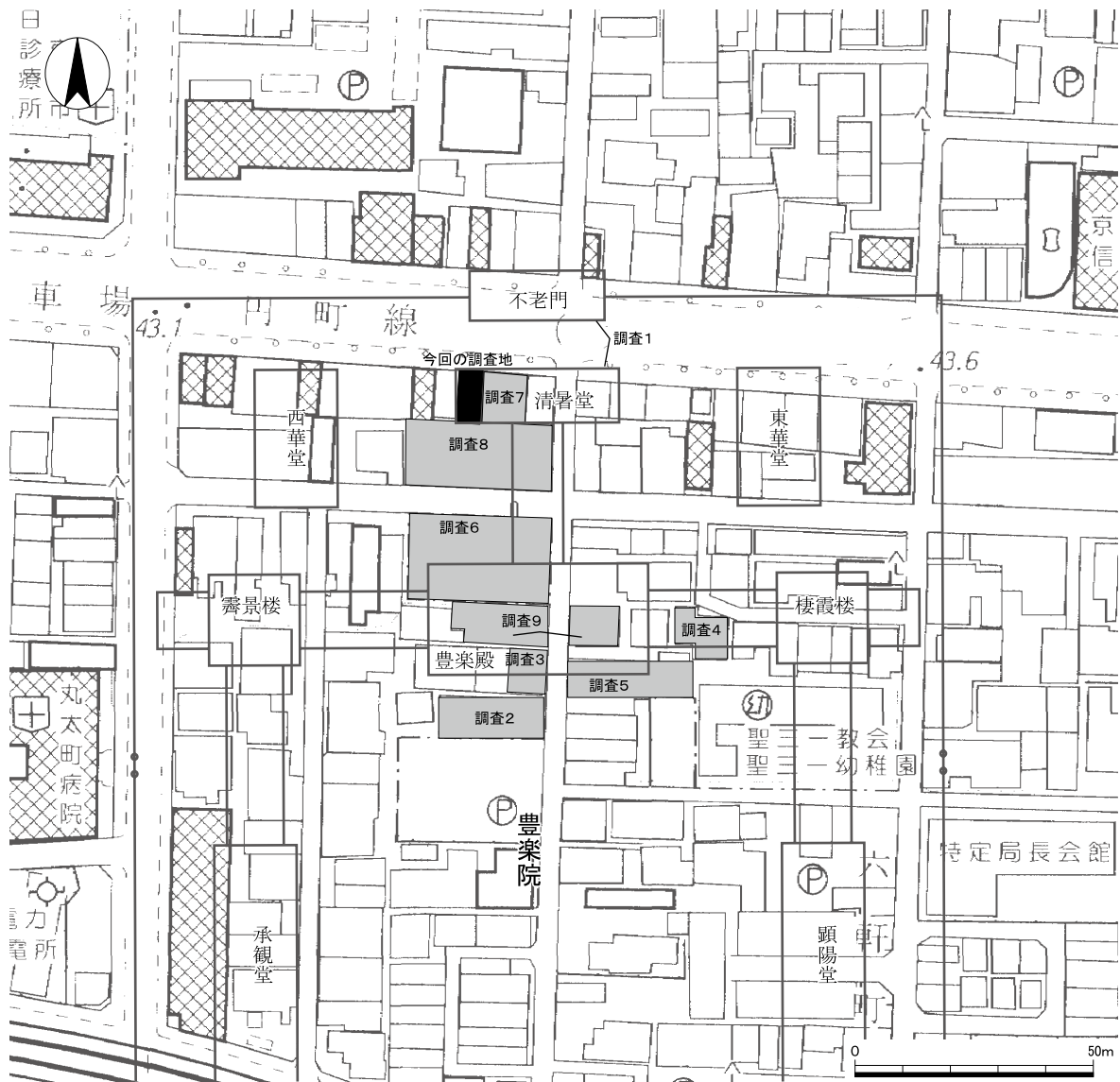


図5 周辺調査位置図 (1 : 1,500)

で築かれていた。また、壺掘地業は一辺2.2×2.3mの方形、深さ約0.5m、中に0.3m前後の川原石(花崗岩、砂岩、チャート)19個が並べられ、底部は播鉢状になる。壺掘地業の中心から敷地南側の段差までの距離は約5mであった。この段差を豊楽殿南縁と推測した。⁶⁾

調査4 1979年調査。個人住宅建設に伴い実施した発掘調査である。深さ0.5mの掘削制限があったため、下層の確認は行っていないが、平安時代の整地層から凝灰岩片を検出した。敷地は周辺より1段高くなっているため、遺構が残存している可能性がある。⁷⁾

調査5 1981年調査。個人住宅建設に伴い実施した発掘調査である。調査区西半で版築された豊楽殿の盛土を確認した。⁸⁾

調査6 1988年調査。豊楽殿基壇北西縁、北面西階段、中央階段及び基壇上面で礎石根固めの壺掘地業を4基検出した。壺掘地業は豊楽殿の北庇側柱筋に当たり、調査3の成果と合わせると、桁行7間、梁行2間の四面庇付東西棟礎石建物となる。柱間は身舎桁行15尺、梁行14尺、庇の出13尺、基壇の出11尺、基壇規模は東西153尺、南北76尺とする復元案が示された。豊楽殿の中心軸

を明確に示したことから豊楽院全体の規模、さらに平安宮復元への重要な成果を得た。対象地は、豊楽殿の遺構が良好に残ること、平安宮内の施設に変遷があったことを発掘調査成果が裏付けた重要な成果であることから、1990年に「史跡平安宮豊楽殿跡」として国史跡として指定された。調査9の成果から、豊楽殿の柱間寸法は身舎の梁行・桁行ともに15尺、庇の出は12尺、東西幅129尺、南北幅54尺となる。また基壇規模は、基壇端を地覆石外側で捉えると、基壇の出は13尺、基壇規模は東西155尺、南北80尺とする復元案が示された。⁹⁾しかし、調査9の調査成果から新たな復元案が示された。

調査7 1988年調査。共同住宅建設に伴い実施した発掘調査である。敷地南寄りで清暑堂の基壇及び礎石根固め痕を確認した。根固めの位置は豊楽殿柱筋の北延長線上にあたることから、清暑堂身舎の桁行柱間は豊楽殿と同じく15尺として復元された。しかし、調査8の成果から清暑堂の桁行柱間は14尺に訂正された。¹⁰⁾

調査8 2007年調査。遺構範囲確認のために実施した発掘調査である。清暑堂基壇南縁と南面西階段及び豊楽殿北廊の基壇盛土を確認した。階段の幅が約5.2mであることから清暑堂身舎7間の桁行柱間は14尺であること、清暑堂南面中央に階段はなく、北廊と清暑堂が同時期に造営されたこと、北廊が創建以降2回拡張されていることが判明した。調査対象地は遺構残存状況が良好で、清暑堂の規模及び豊楽殿北廊の変遷が明らかになったことから2008年に史跡に追加指定され、「史跡平安宮跡豊楽院跡」と名称変更された。¹¹⁾

調査9 2015年調査。遺構範囲確認のために、南北道路を挟んで2箇所で行った発掘調査である。東調査区は道路より一段高まりが残存しており、基壇盛土が良好に遺存していると想定された。東調査区では豊楽殿身舎北東部の礎石根固め3基と東庇の根固め2基、版築された基壇盛土を確認した。西調査区では基壇は削平されていたが、身舎北側桁行の根固め下層の壺掘地業を4基確認した。この調査により豊楽殿の復元案は見直され、柱間寸法は身舎の梁行・桁行ともに15尺、庇の出は12尺、東西幅129尺、南北幅54尺、基壇規模は、基壇端を地覆石外側で捉えると、基壇の出は13尺、基壇規模は東西155尺、南北80尺とされた。調査対象地は遺構残存状況が良好であることから2017年に史跡に追加指定された。¹²⁾

註

- 1) 『平安京提要』 角川書店 1994年
- 2) 第2部「平安京の構造」『平安京提要』 角川書店 1994年
- 3) 佐藤虎雄「平安宮豊楽院の遺物」『古代学』第6巻第4号 財団法人古代学協会 1958年

「丸太町通の千本通を距ること西方へ109米にして聚楽廻西町71番地川井銀之助氏宅の南方に新設軌道の殆んど接して、地下約20cmにして隅部の基壇(M点)を発見した。従来の基礎土木工事に幸いも手を着けられずに遺ったもので、粘土質の土層の上の栗石に据えられ、正しく原位置を保っていた。」
「M点より36m北方に当り、聚楽廻西町64番地津村信一郎氏宅地内において、嘗て隅部をなす基壇の一部を発見したという。或はM点に対応する東北隅をなすものであろうか。さらにM点の南方10m隔てて基壇の一部を原位置において発見した。これ等の石材は凝灰岩の切石にして表面には鉄分を出し

て淡黄色を帯び、破片の切口を見ると灰白色を呈している。」

- 4) 家崎孝治「平安宮の復元について」第11回京都市考古資料館文化財講座資料 1987年
- 5) 寺島孝一「平安宮推定豊楽院の調査」『古代文化』第26巻第4号 財団法人古代学協会 1974年
- 6) 梶川敏夫「平安宮豊楽殿跡緊急発掘調査概要」『平安宮跡』京都市埋蔵文化財年次報告1976-I 京都市文化観光局文化財保護課 1977年
- 7) 鈴木廣司「付章10 豊楽院跡」『平安宮I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 8) 吉崎 伸「平安宮豊楽院跡」『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
- 9) 鈴木久男「平安宮豊楽院(1)」『平安京跡発掘調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
- 10) 鈴木久男・網 伸也「平安宮豊楽院(2)」『平安京跡発掘調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
- 11) 西森正晃「平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
- 12) 西森正晃「IV 平安宮豊楽殿跡・鳳瑞遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成27年度』京都市文化市民局 2016年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図6)

調査の地表面はほぼ平坦で、地表面の標高は42.9mである。調査区北端の層序は、現地表面から順に地表下0.1mまで近現代盛土、その下0.1mまで幕末から明治の盛土層、それより下(標高42.7m)が黄褐色細砂の地山となる。調査区南端では、地表下0.15~0.3mまで近現代盛土、その下まで江戸時代以前の盛土層、0.4m以下(標高42.5m)が褐色細砂の地山となる。

(2) 遺 構 (図7、図版1・2)

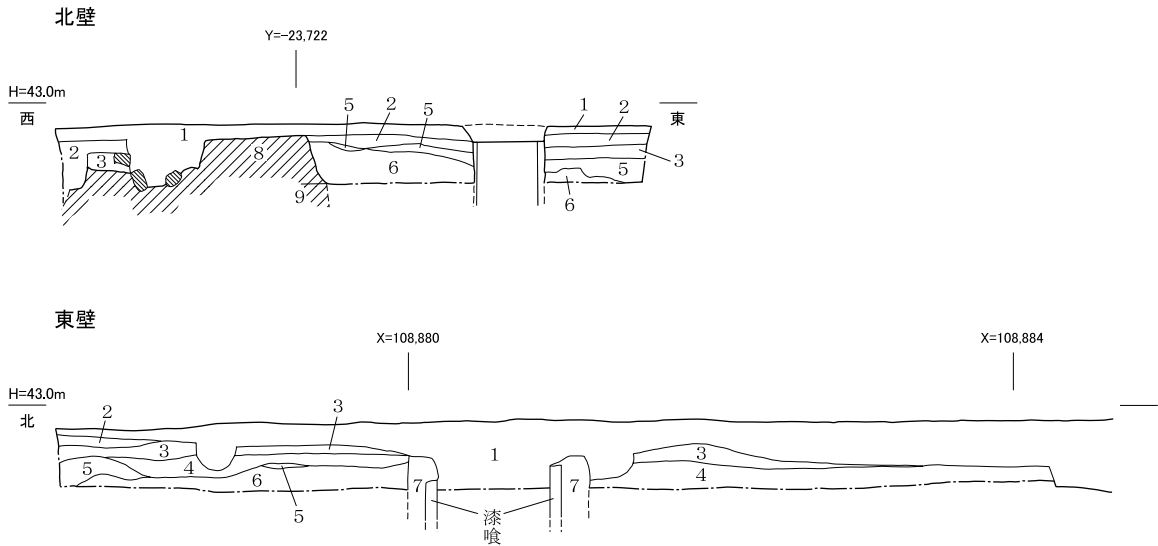
調査区内は近現代の攪乱や削平により、遺構の残りは悪い状態であった。地山が高く残存する調査区北部では、凝灰岩の破片が散在するものの遺構は確認できなかった。しかし調査区南西部で南北方向の溝状遺構を検出し、遺構の状況やこれまでの復元図から清暑堂基壇の西縁部にあたることが判明した。

その他、江戸時代の土取穴(1~5)や土坑(6)、近代の漆喰井戸、石組みの方形排水枡などを確認した。土取穴から平安時代の瓦が混入して出土した。

溝状遺構7 調査区南西部で検出した。南北方向の溝状遺構で、西端は調査区外となり、北側は攪乱を受ける。確認した長さは1.6m、幅は0.6m以上、深さは約0.1mで、地山を切込む。埋土は、平安時代の平瓦や凝灰岩片を含むやや粘質の褐色細砂層である。基壇西縁辺部の化粧石である凝灰岩の延石を抜き取った痕跡と考えられる。

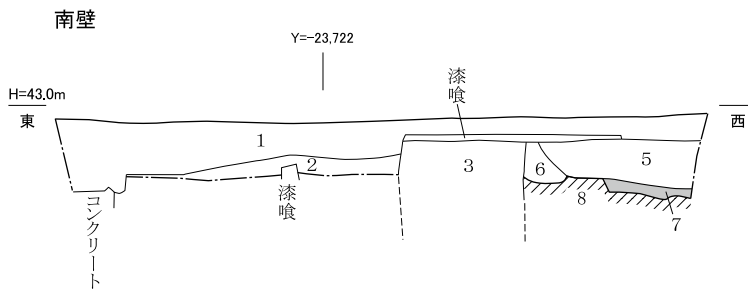
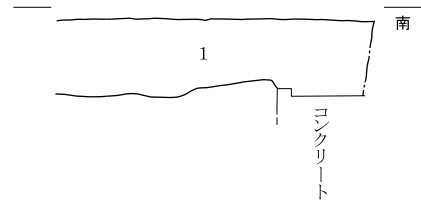
表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	溝状遺構7	清暑堂基壇西縁延石抜き取り痕
江戸時代	土坑6、土取穴1~5	

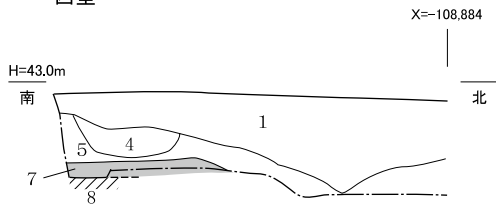


北壁・東壁

- 1 現代盛土
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 φ0.3~0.5cmの礫少量混、炭・焼土含む
- 3 10YR3/3 暗褐色細砂 φ3~5cmの礫中量混、炭・焼土含む
- 4 10YR4/2 灰黄褐色細砂 φ1~3cmの礫中量混、炭・焼土・平安~江戸の瓦片含む
- 5 7.5YR4/4 褐色微砂 堅く締まる
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 φ3~5cmの礫多量混、堅く締まる、平安~江戸の瓦多量・江戸の遺物多量含む
- 7 10YR5/2 灰黄褐色細砂 φ0.5~2cmの礫多量混 (井戸掘形)
- 8 10YR4/2 灰黄褐色細砂 (地山)
- 9 10YR5/6 黄褐色細砂 (地山)



西壁



南壁・西壁

- 1 現代盛土・攪乱
- 2 10YR4/2 灰黄褐色細砂 瓦・焼土・炭多量含む
- 3 10YR4/3 にぶい黄灰色細砂 瓦、陶器含む (土坑6)
- 4 10YR4/2 灰黄褐色細砂 φ0.5~1cmの礫やや多量混、炭含む
- 5 10YR4/3 にぶい黄灰色細砂 やや粘質 焼土・炭・平安~江戸の瓦多量混
- 6 10YR3/3 黒褐色粘質土 φ1~2cmの礫少量混、瓦少量含む
- 7 10YR4/4 褐色細砂 やや粘質 平安の瓦・凝灰岩片含む (溝状遺構7)
- 8 10YR4/6 褐色細砂 (地山)



図6 調査区断面図 (1:50)

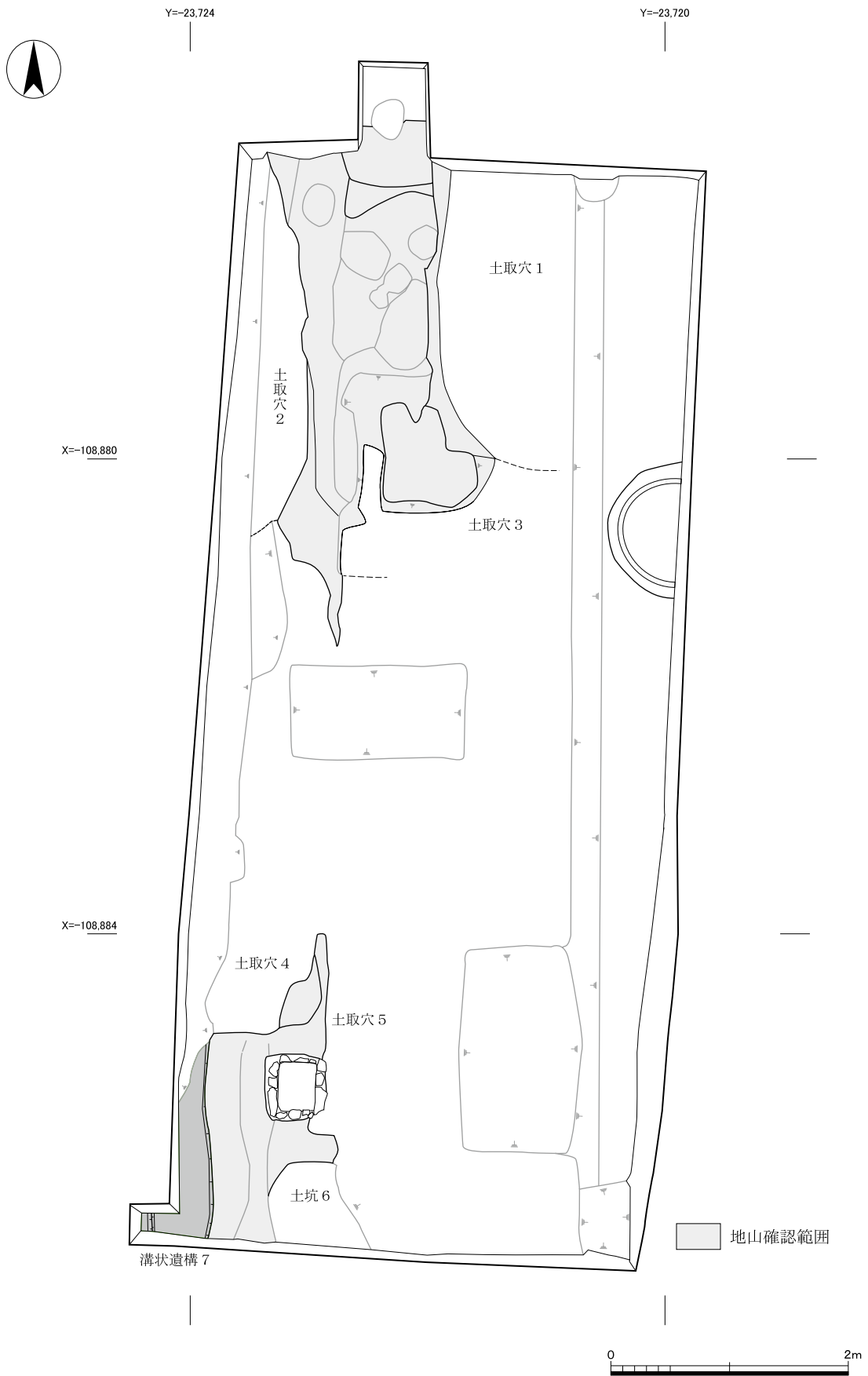


図7 調査区平面図 (1 : 50)

4. 遺物 (図8・9)

遺物は整理コンテナに3箱出土した。出土遺物は、弥生土器、平安時代の緑釉陶器、軒平瓦を含む瓦類、江戸時代の陶磁器類、伏見人形、瓦である。軒平瓦は2点出土した。

瓦1 外行唐草文軒平瓦である。唐草文の主葉は連続し、緩やかに反転する。支葉は巻き込む。外区は珠文が巡る。曲線顎。全体に磨滅が著しく調整は不明である。胎土は砂粒を含み灰黄色、やや軟質である。平安時代前期、西賀茂瓦窯産。南部掘下げ中に出土した。

瓦2 唐草文軒平瓦である。瓦当面の大半を欠損するため、文様の詳細は不明である。外区は珠文が巡る。曲線顎。全体に磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、平瓦凹面布目、凸面タテ方向の平行叩き。胎土は砂粒を含み灰白色、やや軟質である。南西部掘下げ中に出土した。

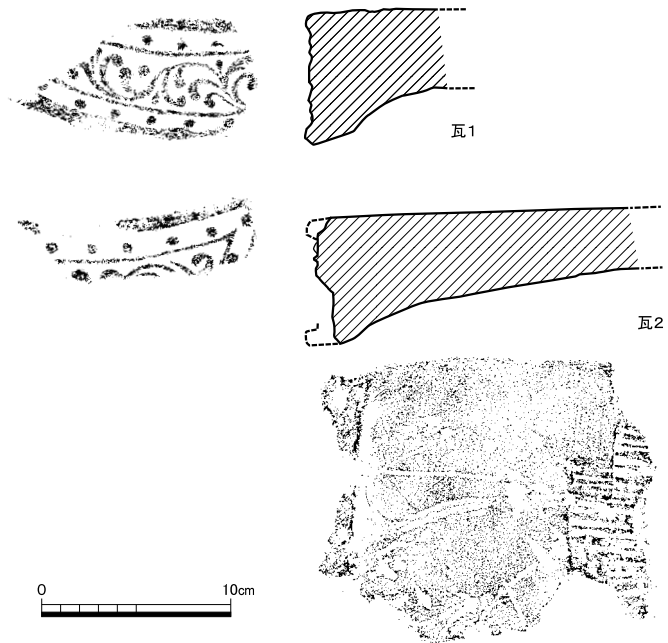


図8 軒平瓦拓影及び実測図 (1 : 4)



図9 軒平瓦

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器				
平安時代	緑釉陶器、瓦		軒平瓦2点		
江戸時代	施釉陶器、伏見人形、瓦				
合計		4箱	2点(1箱)	0箱	3箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

5. ま と め (図10・11)

今回の調査では、清暑堂の基壇化粧である延石抜き取り痕と考えられる溝状遺構7を確認した。調査8で検出した南面西階段の延石据え付け面の標高が42.57cm、底面の標高が約42.51m、南縁延石抜き取り溝の底部の標高が42.54mであり、今回検出した溝の底部の標高が約42.51mとほぼ一致することから、清暑堂基壇に関連するものと判断した。

これによって清暑堂の西縁が確定でき、さらに、すでに判明している豊楽殿の中軸線との関係から基壇の東西規模が想定できた。すなわち基壇西縁はY=-23,724m付近で、豊楽殿北廊中軸線から西へ約16.5~17mであることから、基壇東西幅は33~34m(111~114尺)に復元できる。この値は調査8復元案である基壇東西幅34~35mを裏付けるものである。ちなみにその復元案では、身舎の東西幅29.25m、桁行7間で柱間14尺(98尺)としている。基壇東西幅が114尺であれば、建物西妻柱列から基壇西端までは8尺となる。

今回の調査では、抜き取りと考えられる溝の幅は確認できなかったが、清暑堂の基壇規模、建物規模の復元を示す数値を得たことは大きな成果といえる。

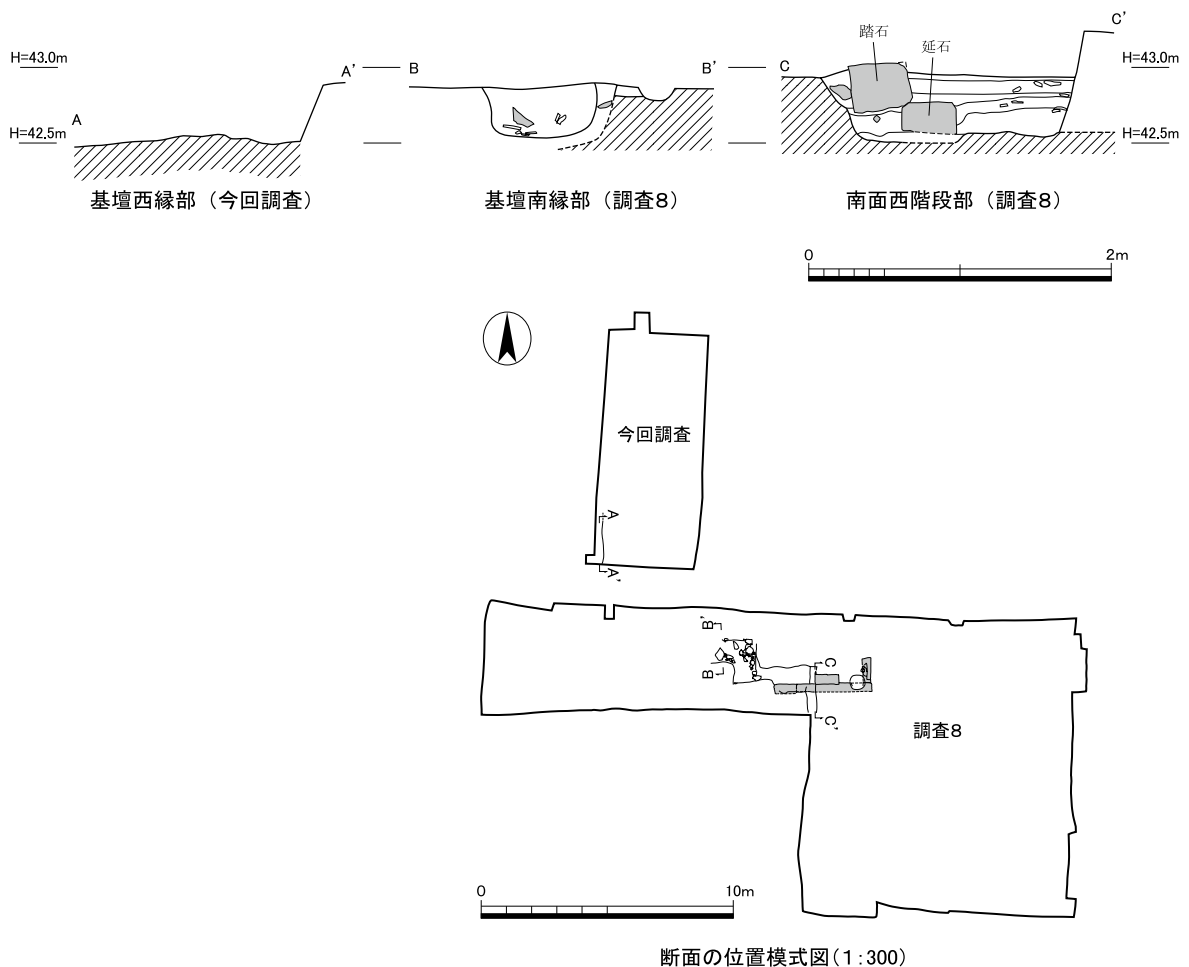


図10 基壇西縁・南縁、南面西階段底面比較図(1:50)

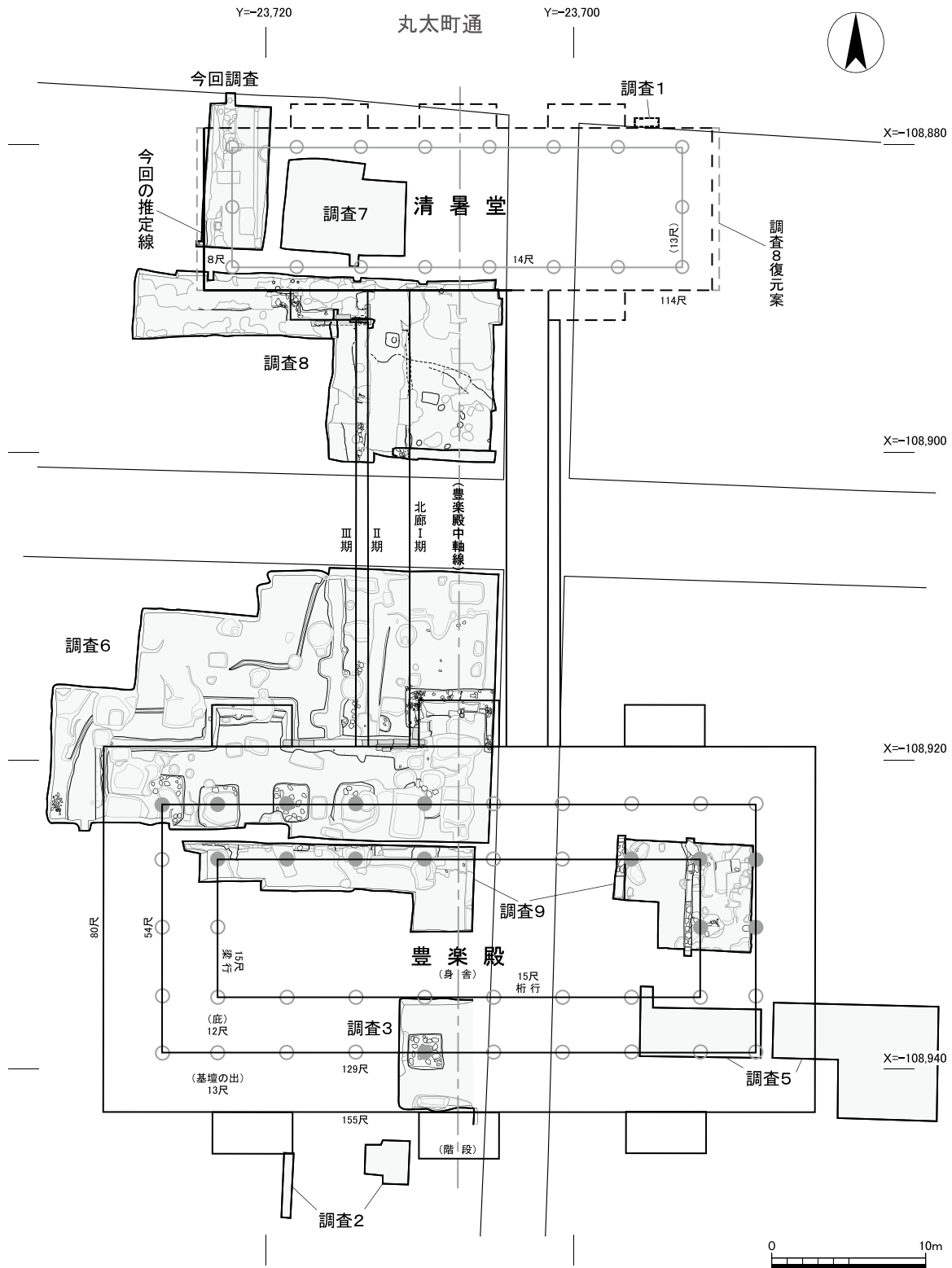


図11 豊楽院北部復元図 (1 : 400)

圖 版



1 北調査区全景 (南から)



2 南調査区全景 (北から)



1 南調査区溝状遺構7 (北東から)



2 北調査区拡張部 (南西から)



3 南調査区と史跡平安宮跡豊楽院跡 (北から)

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきゅうぶらくいんあと・ほうずいせい							
書名	平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2017-2							
編著者名	近藤 章子							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2017年9月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきゅうあと 平安宮跡 ほうずいせい 鳳瑞遺跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 じゅらくまわりにしまち 聚楽廻西町 74-2	26100	2 236	35度 01分 06秒	135度 44分 24秒	2017年5月 22日～2017 年6月1日	37.2㎡	建物新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安宮跡	宮殿跡	平安時代	溝状遺構	緑釉陶器、瓦		清暑堂基壇西縁を 確認した。		
鳳瑞遺跡	集落跡	江戸時代	土坑、土取穴	施釉陶器、伏見人形、 瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-2

平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡

発行日 2017年9月29日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961